

第五章 平野植民地創設に至るまで

グアタバラ耕地での平野運平は笠戸丸の移民と共に通訳として入り7ヶ年に渡る長期に務め、その後期には、副支配人となって5百余家族の労働者の上に「飛ぶ鳥を落とす」権力をふるった事は後世に語り伝えられた。

運平は将来邦人が発展するには植民地開設しかあらず、遠大な希望を持ち、単身ノロエステ沿線に60余日を費し、踏査し現地を見出して帰耕した。

彼がいよいよ植民地建設の事を配下の日本人コロノ達に告げた時、グアタバラ耕地内はもとより近隣耕地に就労していた日本人コロノ達の中にも、彼の理想に共鳴するものが多く、賛成者は2百家族を超えたと云われる。

1915年上旬再び松岡弥作（高知県第2回移民）青木孫八の両氏を伴い現地を踏査。地主のヴィセンテ・ギマランエス氏に土地売買譲渡の交渉を行う。ヴィセンテ地主はオット支配人（独人）において交渉にあたらせ、数度の交渉で成立。総面積合計1,624アルケール（約3975HA）それを各人の申し込み希望に応じ分割、この頃グアタバラ耕地には大正3年（1914年）若狭丸で渡伯した親移民103家族入耕の外に第1回、第2回、新移民が渡伯する毎、入耕してコロノとして就労、優に邦人家族だけでも2百家族以上、働いてるものであった。（「平野25周年史」7ページ）

植民地の土地代 1アルケール（2.42HA）50ミル測量込みで分譲、後に行なわれた調査により本植民地は1度、ブラジル人によって開拓着手されて止め、次にはスペイン人によって再度着手するもの悪性マラリア病のため放棄する。（「平野25周年史」）



静岡県掛川西高校第1回卒業生 明治37(1904)年3月 平野運平の卒業写真（丸山康則氏提供）

植民地開拓

植民地開拓始めが1915年8月2日、開拓には当初より家族入植は危険が伴うとし、先発隊を組織する。20余名の各県人代表の青年先発隊員氏名、大田長次郎、中田三平、戸谷仁造、柳卯太郎、文野数馬（第2回移民で妻専さんが最初のマラリア病犠牲者）、桜井初次郎、吉原八十松、末谷琢馬、樋口仙蔵、岡田達一、前田重作、山崎愛次郎、徳永治作、久保友一、山下永一、平川団四郎、青木孫八。（「平野25周年史」5ページ）

青年先発隊20余名が平野自身に引率され旧プレシデンテ・ペーナ駅に下車した翌日から始まる。1隊が1日ピカーダ（切りぎざみ仕事）清掃しながら森林中に1夜明かして、ドラードス川沿岸に着いたのが3日であった。今でも8月3日を開拓記念日となっている。旧プレシデンテ・ペーナ現、カフェランジャ駅から東北に13キロの地点に1,624アルケーレス（約3975HA）を開拓仕事を始める前に樹間にテントを張り土間で過す。対岸は平地で大木より灌木と雑草、これをなぎ倒し数町歩、焼き払うことが出来る。ドラードス川沿岸に自身の小屋を作り、後続部隊の食糧になる米を蒔き付ける事が手始めの仕事であった。

20余名の先発隊はまだ共鳴者が残っているグアタパラ耕地の各県人移民の代表者達でもあり、切り開いた低地を分割し代表者達の耕作地としてあたえる。後から入って来る後続家族に、平野はブラジル人請負にたのみ切り開いた沿岸までの道路を開設する。稲が実る前に80数家族が入植するので、荷物運搬のためにも馬車道は必要である。

道も出来、蒔いた稲も青々と伸びる頃、次々と家族入植者が着く。その年の12月までに82家族になった。年が明け本格的な雨期入りした頃からわけのわからない発高熱のため1人また1人と床に臥す移民者が出始めたが誰一人として猖獗するマラリア病熱と知らず、合宿所から地区割をした自分の土地に越す頃、1人また1人と倒れ埋葬のあけくれ、棺を移民地の外まで運び出す事も出来ず区内に埋める。これが風土病のマラリアとわかりだした頃、薬局など無論薬となるキニーネも無く、次々と病床に臥す。

当時の悲惨な内容を認められている文を記すると、「死者を埋葬する人も無く、女数人にて死骸を片づけ、あるいは1人にて棺を送り出し。肉身を葬ったものあり、最愛の妻に死なれ愛児も喪ひ、甚だしきに至っては、家族全滅の悲惨なりもあり、この様にして棺を作る板も無く、漬物桶や柳行李に入れて彼の世に旅立たせるもかなりの数に上れり、其の窮状は目も当てられぬ有様にて言語につくし難し」とある。

すでに絶命した母親の冷たい胸にしがみついて泣いている赤子をとなりに臥してる父親は抱き上げる力もなく、又数日枕をとなりにならべ病床についていたが数日前に絶命、その遺体にうじが蠢めいてるのもしらずにいたといった話も伝えられてる。（「移民の生活の歴史」より）

植民地の悲惨な窮境を知った、当時の松村総領事は医事の心得の或る物を派遣、救済に努めるが、栄養も取れていない衰弱きった病人を救うことは難儀業であった。キニーネの申請を州農務局にして受け取るが足らず。その病料にあてる費用は植民地の土地代にも匹敵、7年間監督として貯えもすべて吐き出すがなお足らず、移民50周年記念誌の中に運平は出聖して松村貞雄総領事に再度救援を求め、総領事は自己の懐中より7コトを貸興した。運平氏は欣喜雀躍し、その金でマラリア用キニーネを買い入れ斃れ行く者を救った。この借財は氏の存命中には返らなかった。

入植から1年後の8月頃には衰弱で労働不能、妻を失ったもの、また1家の柱である家長を失った人々等が次々と植民地を去るのであり「約過半数の移転家族を見るの止むなきに至れり」入植1年目に60名に近い犠牲者を出し、これ以上の犠牲者を出すに偲びず、残った30余家族に再度コーヒー耕地に戻り蓄財した上で、再建を勧告するのだが誰1人受け入れず、平野が残って戦うのなら我々も死を共にすると心に誓うものであり、マラリアの危険性の少ない高台を開拓し住む場所を変えるものだった。（「移民の生活の歴史」より）

平野植民地マラリア病犠牲者について（「森の夢」より抜粋）

入植（1915年8月）、当年1915年の暮れの本格的な雨期入りした頃熱病は発生。先発隊の家族入植者は次の通り。

*文野馬太郎第2回移民（1910年）高知県出身グアタパラ耕地より転出であり、妻“専”が12月29日最初の犠牲者“森の夢”85ページ、輝ける碧き空の下では、夫が馬太郎、子供が勝馬である。平野25周年史では夫が数馬、子供は茂重になっている。また弘田千代太は専の実弟（「輝ける碧き空の下で」32ページ）

*そして久保友一の妻“フジヨ”が1月30日29歳で死亡。渡伯大正2年（1913年）若狭丸、広島県安芸郡出身、グアタパラ耕地より転出者。（「森の夢」96ページ）

*日高卯平の妻“ウギ”が2月28日25歳で死亡。（「森の夢」100ページ）

*2月一杯までに16人の死者。（「輝ける碧き空の下で」第1部下）

*荒木クノが3月1日に死亡30歳熊本県玉名郡出身渡伯若狭丸。（「森の夢」100ページ）

*沖田初太郎の弟彦五郎が3月3日に死亡。（「森の夢」102ページ）

*吉武玄作の幼児“守”満2歳の誕生日の3月3日に死亡。（「森の夢」102ページ）

*前浜圭作死亡。（「森の夢」102ページ）

*橋本豊吉の次男“政道”も3月5日5歳で死亡。（「森の夢」103ページ）

*山下ムノの夫“仙次”も3月5日に死亡。（「森の夢」103ページ）

*正月（1916年）の土地割の日に生まれた門前角平の長男“馨”も死亡。（「森の夢」103ページ）

*翌日の3月6日林田伊十の妻“トク”死亡。

*その翌日3月7日イサノ（平野25周年史ではイソノ）が姉の様に慕っていた中川従兄、逸二の妻“フクノ”第2回（1910年）山口県出身グアタパラ耕地転出者死亡。（「森の夢」103ページ）

*次の日3月8日杉野四郎の妻“ヨシノ”死亡。山口県イサノの仲良しで同い年25歳。

*3月9日は3人が死んだ。

*山下ムメの妹寺田スエ

*西ハツエの夫西卯八郎

*国崎音平の娘“ヤス子”この子は昨年9月に産まれたばかりの赤ん坊。棺を作る板もすでに無くヤス子は柳行李に納められた。(「森の夢」103ページ)

*3月10日荒木静加が死亡。母クノの亡骸にすがり母乳を求めるが生きられず。運平が名付け親で1月2日に生まれの僅かの命であった。(「森の夢」104ページ)

*河口繁雄の娘“ハヤ子”グアタパラで産まれた子「父ちゃんお米が食べたいと云って死によった。」(「森の夢」105ページ)

*3月14日7日に死んだ中川フクノの夫“逸二”死亡。(「森の夢」108ページ)

*3月15日吉武サト(守の母)も死亡。大人を入れる棺はおろか代用になる箱もなく火葬。(注)、今でもブラジルは土葬であり、特殊の場合のみ(伝染病等)に火葬に附ス。

*吉武玄作は妻サト、息子守の後を追う様にして6日後の3月21日に息を引きとった。

*その翌日3月22日沖田新太郎が死んだ。(「森の夢」109ページ)

次から次とマラリア病で拓人が逝る中3月が終った。

*クノと同じ頃出産した玉川加江の赤ん坊もやはり死んだ。(「輝ける碧き空の下で」)

*3月に死んだ政道の弟でやっと2歳になったばかりの橋本智も4月7日に死んだ。

*4月16日磯本役蔵(四国生)の生後1年のフミ子が死んだ。彼は10歳の息子と娘フミ子を亡くす。(「輝ける碧き空の下で」)

*5月始め糸永俊三(熊本県玉名郡)の恋女房“モジ”(島原育ち)死亡。素朴であるがやさしい仕草もある人だった。(「森の夢」115ページ)

*藤本テル(16歳)

*前田ミツエ(8歳)父市蔵第4回移民神奈川丸。

*沖田セツエ(5歳)

*浜崎直記（20歳）モジの弟で糸永俊三の義弟3人で渡伯する。（「森の夢」115ページ）

全部上記の4人はグアタパラ耕地出。（「輝ける碧き空の下で」）

*平野川（拓人達が名付けたドロードス川の別名）の上に小屋を作り陽気だった、先発隊員の1人文野勝馬の父馬太郎（数馬）も死んだ。（「森の夢」115ページ）

*上本政一少年も先月、母親“スエ”（4月28）を、今月5月になって父己之吉と妹シズエを失なって、やはり独りぼっちになった。17歳の若き生命力だけがマラリア病の闘いにどうやら耐えるのであった。（「森の夢」116ページ）

*荒木謙蔵高熱のため狂いながら死んでいった。生が途絶えてから数日が過ぎており体に夥しい蛆が湧いて蠢めいていた。病気の謙蔵に食事を運んでいたのは同郷の米崎加賀須であったが、彼も発病する。（「森の夢」116ページ）

6月になるとマラリアはほぼ終焉したが、マラリアそのものよりキニーネの服用で肝臓や心臓を痛めてついに、回復せずに死んだ方々である。特に中年が多かった。

*池戸リヤの夫 竹次郎

*大田長次郎の妻 イト（第5回移民1913年5月第2雲海丸“サン・マルチーニョ〜グアタパラ”）。

*森島リマの夫 政市。

*19歳の山本経治が死んだのは例外と云える。

ここでは事実だけを書いた。登場人物も全て実名。入植当時のマラリアの犠牲者は60余名とも70余名とも伝えられる。ここには私が調査した死亡日時まで確認出来た43名の名を哀悼と鎮魂の心をこめて誌した（醍醐麻沙夫著「森の夢」142ページ）

1915年々末1916年6月頃までに死亡した順に記載。

文野専、久保フミヨ（29歳）、日高ウキ（25歳）、荒木クノ（30歳）、沖野彦根五郎、吉武守（2歳）、前浜圭作、橋本政道（5歳）、山下仙次、門前馨（3ヶ月）、林田トク、中川フクノ、杉野ヨシノ（25歳）、寺田スエ、西卯八郎、国崎ヤエ子、荒木静加（2ヶ月少し）、河口ハヤ子、中川逸二、吉武サト、吉武玄作、沖田新太郎、玉川加江の赤子、橋本智（2歳）、磯本フミ子と10歳の兄、糸永モジ、藤本テル（16歳）、前田ミツエ（8歳）、沖田セツエ（5歳）、浜崎直記（20歳）、文野馬太郎（数馬）、上本ヌエ、上本己之吉、上本シズエ、荒木謙蔵、池戸竹次郎、大田イト、森島政市、山本経治（19歳）。（以上「森の夢」より）

鈴木南樹は平野運平について次のように述べている。

「平野はモジグアス沿岸の米作地に毎年蔓延するマラリアに対する経験を持っている筈である。」平野も又倒れ40度の高熱にうなされた。死んでもここを動かないと頑張る。同じ状態で弟の彦平は戸板で担ぎ出された。

平野は後に松村総領事の勧めでサン・ヴィセンテに行って保養するまでは動くものではなかった。短い月日の間にマラリアで多数の死亡者を出したことに付いて私（鈴木南樹）は長い間疑問をだしているのだった。別の病気（黄熱病とか）が併発しない限り、この様な現象は殆どなかった。或いはマラリアより少し遅れてパラチブスが流行したのではないかという疑問である。パラチブスとマラリアでは療法は全然相反するものである。この事に気付かずマラリア1点張りの治療をしたという事があの様な死亡率を出したのではないかと真因の調査を希望して止まない。

マレタ（アナファレス蚊“ハマダラカ”の媒介するマラリア原虫の血球内寄生による伝染病“マラリア”）の父さんといわれるモジグアスー河の濁流（泥色の濁水流域には発生せず）、マレタの母さんと称するパルド河に挟まれ、特にモジグアスー河の沿岸も所有していたグアタパラ耕地は雨期の増水期には河が氾濫、その濁水の溜り水が清み始め日溜りで温水になるころアナファレス蚊が大発生するものだった。

多数の死者を出した事に責任感に心を痛ましめ、サン・ヴィセンテで軽快し植民地に戻ってからは、ピンガに酔うことが只一つの忘却であった。しかしその酔夢の世界にも尚、彼を責めさいなめ赤鬼や青鬼が現れ迫り襲った。哀れにも、この尊むべき拓人は精神分裂症になってしまいこの様にして1919年2月6日鬼籍につく。（鈴木南樹著「埋もれく拓人の足跡」 211～212ページ）

平野植民地開拓20周年に当たり祖人平野運平氏の負った負債を返済すべく植民者一同、伯貨10コントを集め日本に余生を送る松村菊子未亡人に贈ろうとしたが刀自はこれを辞退して「このお金を受け取るは亡き夫の遺志に反すると思うし植民地のために、有意義に使用していただきたい。」との返信を寄せられたとある。（50周年記念誌82ページ）

平野植民地開拓に先立ちピラ・アドルフォの原始林の開拓の教訓はなかったのだろうか。平野自身はピラ・アドルフォ駅のコーヒー新植栽培地の開拓に、請負仕事の従事はしなくとも、重用視され現場を任された井上馬太郎などの助言が、なかったとは思えないのだが、インテリ青年の不平はただ単に拘束された、コロンビア生活の陰惨の明け暮だけに対してだったのだろうか。多くの犠牲者を出してまでの4年請負の蓄財を求めた平野総監督への不平なのか、今では確かめる術もない。只真面目で謙遜そのものものと香山六郎の第一印象であった畑中仙次郎がこの平野植民地で10年植民地生活する。後にこの体験を活しブラジル拓殖会社に入りバストス植民地創設支配人となった。

平野植民地自治体を大正6年（1917年）に創立。名称を平野日本人会と称す。
初代日本人会長（1917年）平野運平、副会長山下永一、学務委員畑中仙次郎。

2年度会長平野運平、副会長戸田善雄（サン・パウロ総領事館の幹施で医師として植民地に來た）後年ピラ・アマゾナス高拓生の入植した所の医師。

3年度は平野氏の死亡のため実弟の榛葉彦平氏が会長、副会長山下永一、会計植田勘三郎、学務委員畑中仙次郎。（「平野25周年史」 35ページ）

平野植民地創立以来学務委員、会長を務め、また初代ブラ拓バストス支配人であったのは畑中仙次郎。同じように重職を務めている榛葉彦平氏もトレス・バラス（パラナ州）支配人になる。それに福川薩然（第4回移民、神奈川丸、山口県出身、東京外語大卒、真宗坊主）はグアタパラ耕地で富岡漸等と群がっていたこと

もあり、転々と移転していたところ、鈴木貞次郎が福川等を独身青年を伴ってコチア地区に入植した。同地区では日本人会が創立さらにコチア小学校も創立（1916年11月～翌年5月15日迄勤務）。そして平野植民地の旭小学校初代校長として1917～18年まで務めている。後年福川は日本病院事務も務めている。福川校長が辞めたあと、旭小学校の2代目校長に榛葉彦平氏（1918年～1919年まで）が教鞭を取る。また夜間夜学部を設け青年指導に当たり、時には運平自ら教壇に立つものであった。（「平野植民地25周年史」26～29ページ）



福川薩然

付記：榛葉彦平（平野運平氏の実弟）氏、聖市ジャルジン・サウテ1467(1963.12.29)に在住、当時70歳で小柄の人グアタパラ耕地には半年程、又イソノ夫人は元運平夫人でもあり、子供が太陽堂の経営者であった。（「近藤安雄日誌」より1963.12.29）

マラリア菌に冒され犠牲者の多発したその他の開拓地

マラリア菌に冒され最も惨めな目にあった例としてよくノロエステ線の平野植民地が上げられるが、こうした例は初期の開拓地によくあった。東京植民地、ソロカバーナ線第1モンソン植民地、ノロエステ線のリンズ奥のボア・ヴィスタ耕地、リオ・パルド沿岸、サンタ・クルース・ド・リオ・パルド沿岸綿作地帯などである。

原始林の開拓作業は困難きわまり、多くの人が開拓作業を半ばに放棄して出て行った。残った人たち、その殆んどがマラリア病に冒され死亡するという、悲惨な歴史が残る。

（「モジアナの土に生きる」144ページ）

1 イーリャ・グランデ（リオ・グランデ河中にある400アルケール程の島）

1916年～1917年頃当時島全体が原始林に覆われて、比較的木の少ない低湿地に近いところは灌木林と低

湿地の草原だった。

日本移民はこの低湿地から灌木にかけて開拓し始めながら大森林へとだんだん開拓し、最初の作物の米を蒔き付ける。どこの開拓地でも用水の便を考えてか、何れも湿地に近いところに住居を建てた。ところが雨期を過ぎぼつぼつ収穫を間近にひかえる頃 1 人寝込む、2 人臥す。丁度平野植民地と同様、ついには 40 家族中働けるのはたった 1 家族だけという状態になった。マラリア発生である。その頃の薬といえばキニーネ、それとバルダンの注射だけであった。しかもこの頃になると薬は殆んど用をなさなかった。なぜなら地主側から配給されてくる食糧は少なく、貧食のため栄養失調、肉類や油ものをほとんど摂取していなかった。

どの位の犠牲の死亡者が出たのか誰もわからず、だが死骸を遠い町の墓地まで運んで行ける健康な人達がいなかったため、畑のすみ、森林の陰に次々埋葬したという。後年になって遺族達はこの地に訪れ「お骨」を掘って行ったと語り伝えられてる。現在ミゲロポリスの町には数百の無縁仏の骨を集めた大きな「慰霊塔」が建っている。移民 50 年祭（1958 年）に 2 百名程の有志の寄付で建てたものである。

（「移民の生活の歴史」 384 ページ）

2 ノロエステ線アラサツバ駅奥

ここも犠牲者の多い所でアラサツバ駅奥のチエテ河畔パグリ駅～イタプーラ駅方面へ第 1 回移民でフロレスタ耕地から追放された沖縄県人とズモン耕地引き上げの移民 23 家族合計 57 名が、大野基尚通訳と沖縄総代の城間貞次郎の企画する鉄道工夫として 1909 年（明治 42 年）7 月よりその年末まで約 6 ヶ月間従事のこと。一行中マラリアに冒される患者が続出、これらがため 57 人中就労出来るもの 6～7 名に過ぎず、死亡者も現われ、大野通訳夫人も罹病したので、沖縄県人代表と計り半年で引き上げた。

（「移民の生活の歴史」 390 ページ）

3 もう 1 ヶ所笠戸丸移民関係での悲惨な場所

マット・グロッソ鉄道工夫（パンタナール地帯での工事）

なぜ多く初期移民達が鉄道工夫を志望し々流転したかと言えば、無論給料がよかったからで、普通の労働者が日給 3 ミル以下（2 ミル～2 ミル 500 レーイス位）であった時工夫の日給は 5 ミル・レーイス（日本金で 3 円程）。このころ沖縄では小学校の代用教員の月給位であり、1 日の給料が 1 ヶ月の給料と同じ。この魅力で、この重労働についたのか大きな原因である。

イツ駅のフロレスタ耕地を出た沖縄県人、それと他の耕地を飛び出た鹿児島県人など 75 人（内女 2 人）がサントスに集まった。彼らを鉄道建設会社が必要で雇い入れた。小さな貨物船に乗り込む、船には鉄道敷設に必要な資材が積み込んであった。大西洋を南下シラブラタ河に出て、さらにアルゼンチン領を通りパラガイ川を遡上して行くのであった。モンテ・ビデオ沖では暴風にあい九死に一生を得た。ブラジル領ポルト・エスペランサ（希望の港）へ着いたのはサントスを出てから 26 日目であった。ここが目指して来たマット・グロッソ州の鉄道建設の基地である。日本人の工夫達が来たと云うので一同は鉄道敷設会社によって記念撮影まで行った。それが 1909 年中旬頃のことである。

ところが彼らより半年前すでに 2 人の日本人が誘拐されるようにしてここにいた事がわかった。グアタパラ耕

地で契約期間6ヶ月の義務を終了、金に成る別地を求めて、ひよんな事から、リオ、ブエノス、アッスンシオンを経て、ポルト・エスペランサへ送られて来た鹿児島県人の2人であった。2人は大森豊吉（旧姓小牧）と上塘才次（かみもと）であった。後続部隊の中に鹿児島県人折田喜左衛門さんの妻ハルさん（29歳）、竹内喜左衛門さん妻マツエさん（27歳）がおり女気のない殺風景な現場に柔らか味を作っていた。女性でも1人前の給料を払ってもらい工夫の飯炊きをした。だが男だけの世界に女が入ると、とかく問題が起きる。後に上塘さんはその1人の妻ハルさんとアルゼンチンに逃亡してしまう。

（「50周年記念誌」105～106ページ）

しかしどんなに用心してもあのパンタナールの工事では、次々とマラリアに倒れるものであった。人間1人住んでいるところでなし、出てくるのはインジオ位で、当然墓地などあるはずはない。この次々と続く悲惨時に思いついたのが茶毘（だび）に附する事であった。焼いた焼いた、薪を積み重ね黒焦げに焼き上げ、ひろいあげた「お骨」は袋に入れてキャンプに持ち帰り保存。体が続かず、命ある間に引き上げようとするものが出ると、彼に託して、あるいは日本へ持ち帰ってもらうか、また墓地のある所まで持って行って埋葬してもらった。こうして一応工事が終わる頃（1915年）第1回移民の生き残った者達はアルゼンチンへ下り、また日本へ帰ると称してサン・パウロを目指してノロエステ鉄道を南下し、75人組は夫婦者1組と独身者1人を残すのみとなってしまった。残って鉄道の仕事を従事したのがこの地方で一番古い沖縄人である。

（「移民の生活の歴史」392～398ページ）

第1回日本移民の通訳5人男中随一帰国した異色の大野基尚

「脱耕した第1回沖縄県人他の日本移民が失業状態のまま、サン・パウロ市内をうろつき、夜は軒下に寝、飢えをしのぐため食べ物を盗んだ。衣服も破れ、移民家族構成を充たすための俄か作りの家族はバラバラ、亭主から捨てられた妊婦、置き去りにされた老婆、保護者のない病人、自殺する者、その惨状は目も当てられぬ、、、」大野は沖縄県人の世話役の城間貞次郎と相談、この失業中の人達を連れ立ってノロエステ鉄道建設現場へ。（前述）このあと第2回移民が配耕されたジャタイー耕地へ、これも前述のような大問題に至り、「所詮は移民を騙す仕事」と見切りをつけリオへ移った後、世界第1大戦中に夫婦で帰国。大分県の郷里で8年間町長を務める。またブラジル体験を生かして「ブラジルに掛けた紅の橋」を出版。

明治41(1908)年東京外語学校スペイン語科卒業（「我が同胞百年の水流」No.15、2002年3月31日）